



向陵広場

発行号 号外10号
発行日 令和4年6月14(火)
発行元 向陵編集校友会
責任者 伊藤有司(県商10回卒)

さらなる飛躍を求めて 八木克勝 県商 58 回卒(平成 21 年 3 月)

東京パラリンピック卓球代表八木克勝選手が、2024年にパリで開かれるパラ大会の金メダルを見据え、卓球Tリーグの「琉球アスティード」と専属マネジメント契約を結んだ。

中 新 聞 2022年(令和4年)6月11日(土曜日)

Tリーグ・琉球と専属契約

豊橋出身パラ卓球八木選手



東京パラリンピック卓球代表の八木克勝選手(三〇)豊橋市出身が、二〇二四年にパリで開かれるパラ大会の金メダルを見据え、卓球Tリーグの「琉球アスティード」と専属マネジメント契約を結んだ。強豪クラブで競技力の向上を目指しながら、パラ卓球をPRしていくことも目的。「よりの多くの人にパラ卓球を知ってもらい、健常や障害にかかわらず競技を楽しめる環境をつくりたい」と力を込めた。(牧原広幸)

パリ「金」見据え ■ 知名度向上も

先が短い障害があるものの、豊富な運動量を生かしたフットワークが持ち味だ。個人は予選で一勝したが、決勝トーナメントは初戦で敗れ、団体戦は初戦を突破できなかった。東京パラを「楽しかった」と振り返る一方、大会後は引退も考えたが、明かす。パラ大会を東京で開いても、障害者への理解や、パラスポーツに対する機運は日本で高まらなかったという理由。民放での放送はわずかの上、無観客開催となったことも影響し、競技の注目度が上がった実感は得られなかった。以前所属していたモルガン・スタンレー・グループでパリ・パラリンピックを目指す選択もあったが、「続けるのであれば、新しいことをしよう」と決意。交流のあった奈良県の「イシタ卓球場」の関係者から琉球入りを提案されていた。

琉球の練習場で市民と練習する八木選手(左)豊橋市浜道町で

琉球は二〇二二年シーズンに初優勝を果たし、一六年のリオデジャネイロ五輪の団体で銀メダルを獲得した吉村真晴選手らがプレー。八木選手は世界を目指すチームの理念や、沖縄の子どもたちに向けた社会貢献活動に共感し、プロ選手として契約を決めた。琉球によると、パラ卓球選手がTリーグチームに所属するのは初めて。Tリーグの試合に出場することは想定していないが、試合時のイベントなどを通じ、パラ卓球の知名度向上を進めたい考え。琉球は八木選手の練習環境の整備や、スポンサー集めを支援していく。早川周作社長は「金メダル圏内にいる選手と想っている。一緒に世界を取るために全力でサポートしたい」と述べた。八木選手は今後も豊橋を拠点の一つとして、市民との練習も継続する。東京パラ後は用具を一新し、新たなプレースタイルを模索してきた八木選手。「まずはパラ卓球を見てほしい。自分がこれからパラ卓球に挑む子どもたちの目標になれば」と意気込んだ。